

令和2年度(2020年度)

病害虫発生予察情報 第16号

特殊報第3号

北海道病害虫防除所 令和2年(2020年)10月1日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

ウリ類ホモプシス根腐病が道内で新発生

発生確認作物：メロン、きゅうり

病害虫名：*Phomopsis sclerotioides* kesteren

1. 発生の確認経過

- (1) 本年7月下旬から8月上旬にかけて、空知地方の複数地点において、きゅうり、メロンの株が急激に枯れ上がる症状が発見された(写真1)。上部維管束の褐変やヤニの噴出などはみられなかったことから、つる割病やつる枯病などは疑われず、一部では生理障害と判断されていた。
- (2) 中央農業試験場において、発生株の毛細根を観察したところ、黒い筋のような偽子座が観察され(写真2)、ホモプシス根腐病が疑われた。り病部から糸状菌の分離を行い、分離菌のPCR検査を行ったところ、ホモプシス根腐病菌と同定された。

2. 本病の特徴

- (1) 本病は糸状菌の一種ホモプシス・スクレロティオイデスによってウリ科作物に引き起こされる土壌伝染性病害で、感染した作物体は、地上部に激しいしおれ、枯死症状を発症し、果実収穫が著しく減少する。
- (2) 移植直後などでは異常は見られず、果実肥大期や収穫開始後など着果負担がかかる時期に株が急激にしおれ、枯れ上がる。
- (3) 被害が生じた毛細根には病原菌の感染による褐変および黒色構造(偽子座、疑似微小菌核)がみられる。
- (4) 本病は1983年に埼玉県の施設栽培きゅうりで発生が確認され、1990年代は関東地方で多く発生した。その後、2000年代になって東北地方に発生が拡大し、特に露地栽培きゅうりで甚大な被害をもたらしている。
- (5) しおれ症状などが見られない場合でも、周辺に潜在的な汚染ほ場が発生している場合が多い。

3. 防除対策

本病に対する道内での試験事例はないため、「ウリ科野菜ホモプシス根腐病被害回避マニュアル(農研機構東北農業研究センター)2013年2月」に示されている本病の対策を次に示す。

- (1) きゅうりでは、しおれが軽微である場合、転炉スラグを土壌混和し、pH7.5まで改良することにより被害を軽減できる。
- (2) きゅうりでは、かぼちゃ台木を利用する。
- (3) きゅうりでは、しおれによる被害が大きい場合、クロルピクリン剤による土壌消毒を行う。なお、消毒はマルチ畦内処理でも効果がある。
- (4) 夏季に土壌還元消毒を行うことにより、高い防除効果が得られる。
- (5) 栽培終了後に根(毛細根を含む)をできるだけ土壌中に残さないように処分する。
- (6) ウリ科作物の栽培を避ける。
- (7) 発生が疑われる圃場への出入りに注意するとともに、作業機械などは作業後に必ず洗浄する。

4. 本病の診断

- (1) 栽培終了後に根（毛細根を含む）を丁寧に掘りとり、洗浄後、毛細根を中心に黒色構造があるかを観察する。
- (2) 本病の発生が疑われるほ場が発見された場合、農業改良普及センターを通じて診断依頼を行う。



写真1 果実肥大期にしおれたメロン



写真2 毛細根に生じた黒色構造